

平安文学と女性

—層をなす書き手—

平野 由紀子

一

平安時代は女性の書いたものが豊かに残っている稀有な時代である。

今まで、お茶の水女子大学で平安文学をテーマに学位を取得した女子留学生は十人をこえるが、蜻蛉日記、枕草子、源氏物語など、十世紀、十一世紀という古い時代に、女性たちが書き残した作品に強く引かれるようである。タイ、韓国、中国、イタリアからの留学生たちであるが、いずれも自分たちの文化には古くそのような時代はなかったという^(註1)。

私の専門は平安時代の和歌、なかでも後撰和歌集と私家集である。

後撰集は九五一年に村上天皇の勅命によって編纂された史上二番目の勅撰和歌集である。当時の人々の間で会話や手紙として交わされた和歌のことを贈答歌というが、後撰和歌集はその贈答歌を集めることに主眼をおいている。

また、私家集とは、小町や業平、貫之、みつねといった個人を中心とした歌集であり、十世紀後半から、十一世紀にかけて、大量のしかも種々様々なかたちの私家集が編纂された。私家集はテキストが一九七〇年代になってようやく研究者に提供された新しい分野であり、まだ注釈のない私家集が多く存在する^(註2)。

さて、平安時代の人々は家族、親子、きょうだい、夫婦、友人、宮仕えの上司や下の者といった間柄で歌を贈り、またそれに歌で返事をしていた。

二

はじめて女性に恋を打ち明ける歌には形式があった。「しのぶ恋」は、恋を打ち明けられず、周囲の人にも知られないように、自分の恋心を抑えている苦しさ、切なさを歌うものである。それを抑えきれなくなった、と打ち明けるかたちをとる。

① あしひきの山下水のこがくれてたぎつ心をせきぞかねつる (古今・四九一)

② 夏なればやどにふすぶる蚊やり火のいつまでわが身下燃えをせむ (古今・五〇〇)

③ あさぢふのををのしのはらしのぶとも人しるらめやいふ人なしに (古今・五〇五)

④ あふさかのせきにながるいはしみずいはで心におもひこそやれ (古今・五三七)

⑤ 浮き草のうへはしげれるふちなれやふかき心を知る人のなき (古今・五三八)

①は下の句「たぎつ心をせきぞかねつる」に恋の思いがこめられている。水が激しく流れ白く泡立つのを「たぎつ」(動詞)といい、「激しく湧き返る心をせきとめられなくなった」というのが下の句の意である。「せきかぬ」は「せきとめられない」の意。上の句「あしひきの山下水の木隠れて」は「たぎつ」を導く働きをしている。「あしひきの」は「山」にかかる枕詞。山陰を流れる水は木々に覆われてそこにあるとも見えない、けれど激しく流れる、というのが上の句の情景である。このようなものを序詞という。

②の下句は「いつまでわが身下燃えをせむ」と恋の思いがこめられている。表面には表わさず、心の中で熱い恋心を持つことを「下燃え」をする、という。何時までそんな状態が続くのかと嘆くのである。上の句は、夏、人々が蚊を寄せ付けなために煙を出して燃えるようにする蚊遣り火を描く。炎が上がるような燃え方ではなく、くすぶることを「下燃え」というので、上の句は「下燃え」を導く序である。①から⑤は、どれも歌の始まりは「水」「火」「小野」「岩清水」「淵」などの自然界のものだが、歌の末のほうでは恋の苦しみを訴える歌となる。③の「しのぶとも人しるらめやいふ人なしに」(この秘めた思いをあの人には知ろうか、伝える人もいなくて)、④「いはで心におもひこそやれ」(言葉にださずに心のうちであなたのことを思っている)、⑤「ふかき心を知る人のなき」(こんなにも深く思っている私の心を人は知らない)というように。

このように、恋することを表面にださない状態を「しのぶ恋」という。このような歌を手紙として相手に届けば、恋を打ち明けることになる。

さて、恋のせつなさに息も絶え絶えになる状態を「消ゆ」とか「死ぬ」と表現した。

心ざせる女の家のあたりにまかりて、いひ
いれ侍りける 貫之

- ⑥ わびわたるわが身はつゆを同じくは君がかきね
の草に消えなん

(後撰・六四九)

恋人の家まで行き、この歌を贈ったのは貫之である。恋の苦しさに露のようにはかなく消えてしまいそうだが、おなじことなら、あなたの家の垣根の草の上の露として消えたい、と訴えるのである。

源さねあきら、たのむることなくは「死ぬ
べし」といへりければ

中務

- ⑦ いたづらにたびたび死ぬといふめれば逢ふには
何をかへんとすらん

返し 源信明

- ⑧ しぬしぬとききくだにもあひ見ねば命をいつ
の世にか残さん

(後撰七〇七・七〇八) (拙著『信明集注釈』)

これも確実な返事がいただけないのなら「死んでしまふ」と懇願する男に、⑦の歌は「やたらにたびたび死ぬとおっしゃるようですが、よく「逢う」ことがかなうなら命とひきかえにと男の方は言うけれど、あなたには代えるものがないわけね」と中務がからかったもの。⑧は「死ぬ死ぬと何度きいても逢うことがかなわないのだから、この命を残していても甲斐のないことです」と信明はさらに歌を贈って説得しようとする。

男は「会う」「見る」という段階にいたるまで歌を贈り続けるのである。女は男の心が真実なものか、浮気な心ではないかを疑う。

まだあはず侍りける女のもとに「死ぬべ
し」といへりければ、返事に「はや死ねか
し」といへりければ、またつかはしける

- ⑨ おなじくは君とならびの池にこそ身をなげつと
も人にきかせめ

(後撰八五五)

詞書は笑いを誘う。「死んでしまふ」との訴えに女は「そう、なさい」というのである。しかし男はおなじことなら、あなたと並んで「ならびの池」に身を投げたと世の人にしらせたい、とあくまでもあきらめない。ここまでくると、平安時代の男らしさ、というものは後代とはずいぶんと異なったものであったと思わ

ざるを得ない。

三

私家集のひとつに伊勢集がある。宇多天皇の中宮、藤原温子(872-907)に仕えた女房に伊勢という美しく歌才のある人がいた。父は藤原継蔭という伊勢守や大和守になった受領である。ゆえに藤原継蔭のむすめ、伊勢という。この人は古今和歌集に二十二首の歌を採られ女性では第一位。有名な小野小町の十八首より多い。後撰和歌集には伊勢はなんと六十九首も歌を採られている、平安朝きっての著名な歌人であった。

伊勢集は本人が集めた歌集ではなく、十世紀半ばに今見るような家集として成立したと推定される。四百数十首のはじめ三十余首は、まるで物語のように長い詞書で歌と歌が連続して読まれるよう工夫されている。

寛平みかどの御時、大宮す所ときこえける御つば
ねに、大和におやある人
さふらひけり。

と始まる本と、

いづれの御時にかありけむ、おほ宮す所ときこえ
ける御つほねに大和におや有る人
さふらひけり。

と始まる本がある。もとは一つの本から写されたにしても、書写の間に変化した形跡がある。

伊勢集によると、宮仕え先の中宮温子の兄人、仲平の求愛を受けた伊勢は、親の「若い貴公子は頼みがたいものだ」という忠告もきかずに結婚したが、親の案じたとおり、仲平は有力な貴族の婿になって、二人の関係は破綻する。傷心の伊勢は、親のいる大和国に引きこもる。中宮から再び宮仕えに出るように、との誘いを受けて宮中に戻った女に、仲平の兄、時平が歌をよこし、また、仲平からも、その他様々な貴族から歌が来る。その中に歌を贈り続けているのに、返事がもらえない、あまり身分は高くない男が出てくる。

……かへりごともせざりければ、「年経にけるを、
などか「見つ」とだにのたまはぬ」と侍りければ、
この女「見つ」とぞいひたりける。それよりこの
女をば「みつ」とぞつけれりける。……

あなたへ文を贈り続けて何年にもなるのになぜ「見

た」とだけでもおっしゃらないのですか、と男が訴えかけると、この女は「見つ」とだけ返事をした、というのである。それ以来この女を「みつ」とあだ名したというのである。

これらの男の恋歌をすべて受け付けず、女は宮仕えに専念する。そして、宇多天皇の寵愛をうけ、男皇子を産む。親の喜びはこの上なく大きかったのだが、なんと、幼くしてその皇子は亡くなってしまふ。女は死にたいと思ってもかなわず、亡き子を夜昼恋しく思う時に

この「みつ」とつけたりし人のもとより
 ⑩ 思ふより言ふはおろかになりぬればたとへてい
 はむ言の葉ぞなき
 さらに物もおぼえねばかへりごとせす

（『平安私家集』所収 伊勢集二六）
 と、この男から歌が来る。「口に出して言うと浅いものになってしまいますので、あなたの気持ちを慰めたくても、どのように表現したらよいか言葉が見つかりません。」というのであった。

四

儒教文化圏から来た留学生が私に話してくれたことがある。それは平安文学の男女の関係が不快であるということであった。この留学生は近世の怪異小説を対象に研究をした。中国や韓国の伝統は儒教に基く父系社会であるが、日本の近世もその点では同じであり、この場合、道徳観に違和感を抱くことはないであろう。しかし、平安時代は不思議なことに婚姻や家族のかたちが全くちがう。

高群逸枝の『招婿婚の研究』^(註3)を受けてウィリアム・マッカロウ氏^(註4)は文化人類学や社会学の知見をもとに様々な社会の婚姻居住規制（夫婦が婚姻後どこに住むかを決定するもの）として次の四つをあげた（「平安時代の婚姻制度」）。

- (一) 夫方居住……夫と妻が夫の家の近くに住居を構えるか、ないしは夫の親の家に住む
- (二) 妻方居住……夫と妻が妻の家に住む
- (三) 新処居住……夫婦が彼ら自身の独立した家屋に居住する
- (四) 訪 婚……夫婦は別に住み、夫は妻を訪問し、同居しない

なお、(三)の場合、夫が用意する場合と、妻の家が用意する場合とがある。

平安時代の記録や日記・物語の婚姻の例を調査して、(二)(三)(四)は見られるが、(一)がないこと

を明らかにした。現在、議論の中で(三)の夫が用意する家に新夫婦が住むことを夫方居住と混同することが多い。しかし、(一)の要点は、父子同居である。平安時代、それは皆無である。父子不同居、これが平安時代の婚姻の特色なのである。

女は自分の邸にいて、夫を迎える。夫が用意した邸で住むにしても、そこに夫の両親がいる、ということはない。

古代中国は(一)の夫方居住である。複数の女性が男性の生家で同居し、男系的な秩序によって一人の妻とその他の妾に厳しく分けられる婚姻制度である。妻は「聘」という六礼をもって迎えられ、「宗」の中に位置付けられるが、妾は正式の結婚を通過せず、夫の家で正式な地位を持たない。妻と妾は決してその地位を交替することはなく、妾は夫にたいしてと同様、妻に対しても服従しなければならない。このような妻妾制度は古代日本社会にはなかったのである（胡潔『平安貴族の婚姻慣習と源氏物語』^(註5)）。

平安時代の子供は母方で育つ。また、結婚すると、男子は家を出てゆくことになる。邸は女の子に譲られる。

善悪、好悪は別にして、平安時代には後代の日本と全く異なる社会があったのである。

五

後撰和歌集の贈答を読むと、歌を仮名文字で記すことの出来る女性は数多くおり、層をなして存在したことがわかる。橋本英子氏の後撰集の作者伝^(註6)（岸上慎二『後撰和歌集の研究と資料』所収）によれば、名前の判明する作者の中で、男性一二〇人に対して女性八六人である。詠み人知らずの中には女性ももつといはるはずで、この対比はいかに女性も歌を残しているか、わかるであろう。平安時代には読み書きする女性が層をなして存在していた。

また、よく引かれることであるが、村上天皇の後宮にいた宣耀殿の女御の話が枕草子に語られている。「清涼殿の丑寅の隅の」で始まる段である。

ある穏やかな春の日、大きな青磁の瓶に華やかに咲きこぼれる桜の枝がさしてある。そこに桜の直衣を着た若い大納言尹周が座っている。帝は昼の食事を済ませて、こちらの定子中宮のもとにいらっしゃる。帝は十五歳、中宮の周囲には清少納言をはじめ、女房たちが仕えている。そこで中宮は「ただいま、ふと浮かぶ歌をこれに書け」と女房たちに命ずる。女房たちは春のうた、花の心の歌など書くが、清少納言は

年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見れば物

おもひもなし

という「花をし見れば」を「君をし見れば」と変えて書いた。すると中宮はにっこり笑って「この心が見たかったのですよ」と言われた。

これは古今和歌集にある藤原良房の歌である。父がその娘の棠花を桜の花とともにたたえた歌である。今、中宮の兄が桜の瓶のそばにいる。もっともふさわしい歌はこの古今和歌集の歌の場面を思い浮かべた清少納言の詠いぶりであった。古歌の一部分を変えて、その場にふさわしくリメイクすることは非難されるところか賞賛される行為であった。そこで、帝の敬愛する四歳年上の中宮は、次のような話をする。

帝の祖父にあたる村上天皇の御世のこと。宣輝殿の女御と呼ばれる方は小さい時に、父親から、「第一には字を上手に書くこと。次には琴の琴を人よりうまく弾けるようになりなさい。そして、古今和歌集を全部暗記なさい」と教育された。そのことを聞いてある日、村上天皇は試された。「いつ誰それが詠んだのは何の歌か」と。まちがいや忘れたところを基石でかぞえよう、となさったが一つも間違えることはなかったと。

この女御、藤原芳子は、習字、和歌、琴の琴を習うように教育され、古今和歌集の二十巻すべて覚えていたという。女子の教育は、このようであった。

和歌のやりとりが日常生活の折々に行われ、薄様という紙に書かれた歌が堆積し、それらが一冊の冊子にまとめて書かれれば私家集が生まれる。或る著名な歌人の生涯や半生が浮かぶような歌の排列を考え、詞書も付すとそれは物語にも似る。

平安当時、女の「心をやるもの」（気晴らし、慰め）として「物語」があげられる。日本人は中学生や高校生くらいから、平安時代の紫式部や清少納言、道綱母が書き残した作品名は知っている。しかし、層をなして物を書く女たちがいたことは余り知られていない。また、千年も前の女性たちが書いたものが残っている—そんな文化は古代中国にも西欧にもなく世界の中で日本だけである、ということも知る人は少ない。

紫式部は非常に仲の良い同性の友達に自分の書いた物語を見せていた。源氏物語の中にはそのような読者の批評を充分意識した巻の構想や表現が、そちこちに見られるのである。

六

また、先に引いた伊勢集の冒頭の物語化された部分は、伊勢の仕えた中宮温子の死で終わっている。伊勢は温子の死後も第一級の歌人として、次々に歌合や屏風歌の場で活躍したが、伊勢の生涯の或る部分までで

この物語化歌群は終わる。

これはなにを描こうとしたものだろうか。

この中に次のような個所がある。幼い皇子を桂の里において宮仕えしている伊勢に、中宮は次のような歌を贈る。

⑪ 月のうちに桂の人をおもふとや雨に涙のそひて
ふるらん

御かへし

⑫ ひさかたの中に生ひたる里なれば光をのみぞた
のむべらなる

(西本願寺本 伊勢集二二・二三)

中宮には内親王が生まれていたが、男皇子はなかった。雨の降る日、「桂においたお子を思って、あなたの涙がこの雨に加わって降るのでしょうか」と、中宮はやさしい同情あふれる歌をおくる。土地の名、「桂」は、中国の伝説に「月にあるという桂の大樹」に結びつくので⑪の初句は「月のうちに桂の人を」となる。伊勢の返歌⑫の「ひさかた」はかつては枕詞だったがここでは「月」の異名となっている。「桂」を「ひさかたの（月）の中に生いたる里」といい、中国では天子を日に、皇后を月にたとえることにより、「あなたさまの御慈愛だけをお頼みするのでございます。」と伊勢は返したのである。

これに見るように、後の心はあくまでも優美、仕える伊勢の後への敬愛も限りなく、ここには美しい主従関係がある。たしかに、伊勢集の物語部分は伊勢の波乱に満ちた半生を語るとともに、宮仕え女性の理想を形象化したもの（木村正中『私家集と歌物語』、秋山虔『王朝女流文学の形成』、片桐洋一『伊勢』^(註7)）といえよう。

女性が同性に抱く敬愛といったものも、平安文学のなかでは大きな部分を占める。枕草子の中宮定子に対する清少納言の敬愛、源氏物語の中の紫の上に対する侍女らの敬愛と同質のものが、それらに先じて伊勢集冒頭の物語化部分には見られると思うのである。

【追記】北京日本学研究中心での院生の発表の合同ゼミの中で、中国の文人の開催主への賛辞あるいは阿諛追従に言及された時、この伊勢集の⑫の歌もそうではないか、との意見があった。

しかし、次のように愚考する。寵愛を競い、男皇子を産むことが求められる中、伊勢にこのような思いやりある歌を贈る中宮。また、それに謙虚に応じる伊勢。伊勢の歌を中宮の庇護を頼むといって阿る姿勢と見るよりも、主従の受け応えこそ伊勢集の眼目だったと考

える。すなわち、中宮の歌いかけこそ、発端なのであり、二人の関係性が理想的に形象されている世界と読むのが自然ではないか。

注

- (1) 拙稿「国際化時代の中古文学研究」『中古文学』七九号 学会創設四十周年記念号Ⅱ記念シンポジウム基調報告 二〇〇七年六月。
- (2) 私家集大成 書籍版 和歌史研究会編 明治書院 昭和四六年—昭和五二年。
私家集大成CD ロム版 エムワイ企画 二〇〇八年。
拙著 『平安和歌研究』風間書房 二〇〇八年。
- (3) 高群逸枝『招婿婚の研究』（講談社 一九五三年）。
- (4) ウィリアム・マッカロウ「平安時代の婚姻制度」一九六七年。同志社大学人文科学研究所『社会科学』栗原弘訳一九七八年十二月。
- (5) 胡潔『平安貴族の婚姻慣習と源氏物語』風間書房 二〇〇一年。
- (6) 橋本英子「後撰和歌集作者伝」（岸上慎二『後撰和歌集の研究と資料』所収 新生社 昭和四一年）。
- (7) 木村正中「私家集と歌物語」『国文学』昭和四〇年

十月。

秋山虔『王朝女流文学の形成』塙書房 昭和四二年。
片桐洋一『伊勢』日本の作家7 新典社 昭和六〇年。

参考文献

- 古今和歌集 日本古典文学大系8 佐伯梅友 岩波書店 昭和三三年
古今和歌集全評釈（上）（下） 竹岡正夫 右文書院 昭和五一年
後撰和歌集 新日本古典文学大系6 片桐洋一 岩波書店 一九九〇年
後撰和歌集 新注八代集3 工藤重矩 和泉書院 一九九二年
拙著 信明集注釈 私家集注釈叢刊13 日本古典文学会 平成一五年
拙著 伊勢集 新日本古典文学大系28『平安私家集』所収 岩波書店 平成六年
伊勢集全釈 私家集全釈叢書16 関根慶子・山下道代 風間書房 平成八年
伊勢集 和歌文学大系18 高野晴代 明治書院

ひらの ゆきこ／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授